

自分の「これまで」と「これから」を考える

——「教育学 A・B」授業報告——

友 野 清 文

はじめに

私は 2002 年度から本学の非常勤講師を勤めている。2002 年は厚木キャンパス最後の年であった。2 年目以降には、新しい相模原キャンパスで、「歴史と人間(総合科目)」(本年度から「自己理解(総合科目)」・「教育学 A・B」・教育学科科目「家庭教育」(昨年度まで)・教職課程「教育原理」(今年度から)を担当してきた。その中で「教育学」は厚木キャンパス時代から現在まで通して 5 年間担当している科目である。

率直に言えば、特別なことをしている訳でもなく、「黒板とレジュメ」を中心とした昔ながらの授業であり、内容・方法ともにここで取り立てて書くべきことはないのであるが、5 年間にわたって担当させて頂いており、相模原キャンパスでは新しい試みである「青山スタンダード」の一科目でもあることから、拙い授業ではあっても、その報告を行うことが義務ではないかと考え、紙面を頂いた次第である。

ここでは昨年度の授業を中心として、内容の概要や方法その他を紹介し、併せて「授業改善」に関わる点に触れていきたい。

1 「教育学 A・B」の概要

本科目は、2 年生以上を対象としており、実際にも 2 年生が中心で、1 割程度 3 年生以上が含まれる。昨年度まで水曜日 3 限(今年度は同 2 限)に置かれている。

A と B とは独立した科目で、前期の「教育学 A」と後期の「教育学 B」と

自分の「これまで」と「これから」を考える

に分かれており、各2単位である。学生は前期のみ、あるいは後期のみの受講もできる。現実には、AとBを通して受講する学生が多いが、内容はどちらか一方のみでも完結するようにしている。

受講人員は、初年の厚木キャンパスの時(2002年度)は40名程度(この時は、通年授業で、水曜2限と3限の2コマが設定され、同一授業を2コマ行った)であり、相模原キャンパス1年目(2003年度)が約80名、04年度から150名を越えるようになった。昨年度は約200名であった。教室はE102またはE103である。

受講生の所属学科は多様であり、理科系の学生も多い。青山スタンダードは以前の「一般教養科目」という性格を持っていると私は考えているので、様々な学科の学生が受講することは大いに歓迎である。そのため歴史や社会科学の知識を前提としないように心がけている。

受講人員に関しては、1年生を対象とした総合科目についても同様のことを考えるのであるが、「適正規模」というものがあるのかどうか、あるとすればどの程度なのかということを常に思う。これは個々の授業の問題であると同時に、カリキュラム全体に関わる問題である。事務局に確認したところ、本年度の「自己理解」に関する科目では160名程度で調整をしているとのことである。このような多人数の授業と、フレッシュャーズセミナーのような少人数の授業とのバランスが取れるような形にしていけることが望ましいと思われる。

2 授業の目的と内容

毎年度初めに学生に配られる「講義概要」では、次のように書いている。(以下は今年度のものであるが、昨年度もほぼ同様の文面である。)

【講義概要】(教育学A・B共通)

今この文を読んでいる皆さんは、これまで10年以上にわたって学校教育を受け、さらに数年間引き続き教育を受ける立場にあります。その中でいろいろな「被教育経験」を積んでおり、教育について改めて考える必要を感じないという人も多いでしょう。

しかし他方で、これまでに一度は「一体何のために勉強をするのだろうか?」「何のた

めに学校に通うのか？」という疑問を持った経験はあるのではないのでしょうか。

このように学校や教育は、非常に日常的で身近なものでありながら、それが自分にとってどういう意味を持つものなのかは、必ずしもはっきりしている訳ではないのです。

教育学は「教育」あるいは「学習(学び)」とはどのような営みであるのか、それがどのような形で実践されていくのか、そして人が育つとはどういうことか、を考えていく学問です。そして現在の自分というものは、これまでの意識的・無意識的な「教育」や「学習」によって築かれたものですから、「教育」を考えることは、自分自身を振り返ることであるとも言えます。

この講義のねらいは、教育についての知識や技能を与えることよりも、教育や学習とは何かということを原理的に考えるヒントを提示することにあります。自己の教育体験にこだわりながら、それをより広い視野の中に位置づけ、自分のこれまでの被教育体験が何であったのか、これからの「学び」をどのようなものとするのか、ということを考えるための材料を提供することが目的です。

【授業計画】(教育学 A)

「教育学 A」では、主に現代の教育状況と教育課題を検討することを通して、現在、そしてこれからの社会の中での「教育」や「学習」のあり方を考えていきます。

現在「教育改革」が急ピッチで進められており、教育基本法「改正」も政治日程に上っています。このような状況を念頭に置きながら、1980年代以降の教育理念・制度・内容・方法に関わる諸問題(自由化・民営化・「総合的な学習の時間」等)や、子ども・青年を巡る問題(学力低下・非行・不登校等)、さらに現代の教育諸課題(国際化・ジェンダー等)を取り上げていきます。

詳細は最初の授業の時に伝えますが、受講する方の希望もできるだけ取り入れたいと考えます。

ここで扱う諸問題について、後期に「教育学 B」で歴史的・思想的な視点から改めて考えていきますが、「教育学 A」のみの受講もできます。

【授業計画】(教育学 B)

「教育学 B」では、現代の問題を考えるために、「これまでの教育はどのようなものであったのか」そして「教育についてどのような思想が存在したのか」を検討します。

前半では主に近代日本の教育の歴史を概観し、教育がどのように組織されてきたのか、その中でどのような「学び」があったのかを考えます。

後半では近現代の代表的な教育思想を検討します。私たちが当然のこととしている教育観・学習観や子ども観がどのように成立してきたのか、どのような意義と問題をはらんでいるのかを考えていきます。

講義の流れとしては、前期の「教育学 A」で取り上げた諸問題を歴史や思想の中で改めて考えていくという形になりますが、「教育学 A」を選択するかどうかに関わらず、独立して受講可能です。具体的な内容は最初の授業で伝えます。

先に述べたように、受講生には教育学やその周辺領域を専門としない学生が多い。しかし当然のことながら、学生は学校という場に10年以上身を置き、現在も大学に在籍している訳である。またアルバイトで塾の講師や家庭教師として、「教える側」に立っている学生も多い。つまり生活の中で「教育」や「学校」というものに常に接しているのである。そのような学生に対して「教育学」という授業を行う時、私は「教育学」やその「学説」を系統的に話すことよりも、各自がこれまでの教育体験・学校体験を振り返り、自分の受けてきている教育がどのような性格を持つものなのか、自分たちはどのような社会状況の中で育ってきたのかを考えるきっかけを示すことを目的としている。そしてそのことが、これからの自分の進む方向を考えるヒントにもなるのではないかと思っている。

つまり、私もかつてそうであったが、自分の経験した「学校」やそこでの「学習」のあり方が唯一のものであり、昔も今も、そして将来も変わり得ないものであるという感覚が学生には強いように思われる。他の経験があまりなければそのように感じることは当然ではあるが、できるだけ「学校」や「教育」を相対化する視点を提供することが必要なのではないかと考えるのである。例えば「黒板の前に一人の教師が立ち、生徒はそれに向き合う形で同じ方向に座る」という「学級での一斉授業」の形態は、実は近代学校の発明であり、かなり特殊が学習形態に過ぎないということを知ることによって、「教える-教えられる」関係をより多様なものとして考えることができるようになるだろう。また「勉強する」ということは、何度かの受験を経て大学にきた学生にとっては「与えられた知識の量を増やし、自分の学力を高めていくこと」に他ならないであろうが、そのような「知識中心」もしくは「個人中心」の勉強以外の「学習」があり得るということを知ること大切だろう。さらに「不登校」や「いじめ」について、『不登校』や『いじめ』にどう対処するのかという形ではなく、「どうして『不登校』や『いじめ』が問題となるのか」という別の形の問いを示すことで、『教育問題』というものは、それを問題とする側の問題なのだ」という視点が得られる。もちろんこれらのことは、社会科学全般に当てはまることでは

あるが、教育学では、教育や学校という身近な素材を取り上げることができるため、学生は自分の問題として捉えることができるであろう。

教育学を専門とするのでも、将来教職につくのでもない学生に対して、今の学校や教育にどのような問題・課題があるのか、そして自分自身にとって「勉強する」ことの意味は何であるのかということのを少しでも考えるきっかけにしたいと思っている。

さて具体的な内容であるが、前期の教育学 A では、「現代の教育に関わる諸問題を考える」というテーマで、毎回トピックを設定している。いわば「一回完結型」の授業である。「教育とは何か」といった抽象的な議論はあえて正面に出さず、できるだけ学生にとって身近で考えやすいようにしている。昨年度の内容は以下の通りである。授業時間数は、年により 13 回と 12 回がある。(昨年度は 13 回)

- | | | |
|----|-----------------|----------------|
| 1 | イントロダクション | |
| 2 | 学校の現在 1 教育制度改革 | 「自由化・個性化」 |
| 3 | 学校の現在 2 学校改革 | 「学校選択制・学校五日制」 |
| 4 | 学校の現在 3 教育内容 | 「総合的な学習・学力低下論」 |
| 5 | 学校の現在 4 教科書制度 | 「『歴史教科書』問題」 |
| 6 | 子どもたちの現在 1 | 「不登校・ひきこもり」 |
| 7 | 子どもたちの現在 2 | 「いじめ・自殺・犯罪」 |
| 8 | 現代の課題 1 | 「開発と教育」 |
| 9 | 現代の課題 2 | 「国際化と多文化教育」 |
| 10 | 現代の課題 3 | 「ジェンダーと教育」 |
| 11 | 家族と家庭教育 | 「少子化と子育て」 |
| 12 | 「教育基本法」改正問題について | |
| 13 | まとめ | |

自分の「これまで」と「これから」を考える

「現代の教育問題」という時、これで十分かどうかいつも考えており、毎年若干の修正を行っている。またそれ以上に、現実の動きをフォローするために、同じトピックでも、内容は毎年更新する必要があることを痛感している。例えば教育の自由化(第1回)に関わって、(構造改革特別区域における)「株式会社立学校」については、授業を始めた4年前は「検討中である。」という段階であったが、本年度では「既に相当数が設置されていて、成果と問題点が現れている。」ということ話すこととなった。「学校選択制」や「総合的な学習」についても同様である。また本年度は第8回と第9回の「現代の課題」をはずし、その代わり、「教科書検定制度」と「特別支援教育」を加えた。「開発教育」や「多文化教育」の重要性は感じているが、教科書検定制度については、5回目の歴史教科書問題に関連して触れるだけでは時間不足であることを感じていること(「家永教科書裁判」も既に歴史的なものとなった現在、そこで問われた論点と意義は伝えていきたいと考える)、「特別支援教育」については「障害児教育・特殊教育」の流れの中で是非その内容と問題点を伝えたいという思いがあったことによる判断であった。

授業は毎回レジュメと少し多めの資料を用意して、それをもとに話を進めるというスタイルである。「多めの資料」というのは、授業をきっかけとして自分で考えて欲しいという思いから、授業で触れることのできないものも加えているためである。また参考文献・論文もできるだけ多く示すようにしている。

授業を進める中で留意していることは、「基本的な情報と判断の材料を豊富に提供し、判断は示さない」姿勢を守ることである。もちろん授業のトピックを選ぶ段階で既に私の「判断」が含まれている訳であり、また完全に「客観的」「中立的」な内容があり得るとは考えないが、少なくとも意見表明に関わる資料(例えば新聞の社説等)では対立する見解・立場を反映させたものにするのを心がけている。当然のことではあるが、「どう判断するか」は学生自身が考えることであり、授業は「問題の存在自体」を知らせ、そこにある論点を明らかにすることが目的であると考えてるのである。もちろん自分自身の意見を話すこともあるが、その場合には必ず「これは私自身の考えであるが」とい

うことを明らかにし、同時に自分のものとは異なる見解・立場を併せて紹介するようにしている。

ただ私の個人的な感覚としては、「歴史教育問題」や「教育基本法改正問題」についての学生の反応に、現在の日本社会の「危険性」を感じることは多い。例えば「愛国心」について学生からは「愛国心を持つのは当然であり、それを学校教育目標の一つにすることに問題はない」という意見がかなり出てくる。(もちろんそうではない意見も多いが。)私には結論がどうであるかということよりも、「愛国心」の内容やそれが語られてきた歴史的・政治的文脈にはあまり関心が向かず、一般的に「愛国心」を是認する姿勢が気にかかる。言い換えれば、「国家」と「国民」(自分)との緊張関係が感じられず、ある意味で国家の「パターンリズム」に依存しているように思われるのである。教育学の授業の内容ではないことかもしれないが、このような問題については学生達に是非自らのこととして考えてもらいたいと思っている。(受講生の中には少数ではあるが、アジア諸国からの留学生が毎年おり、彼らの意見や感想にはいつも注目している。)

後期の教育学 B では、「日本の近代教育の歩み」(歴史)と「近現代の教育をめぐる思想」(思想)という二本の柱を立てている。授業の内容は以下のとおりである。(昨年度は本務による休講が1回あったため12回)

- | | | |
|---|------------|--------------------|
| 1 | イントロダクション | |
| 2 | 教育の歩みを振り返る | 1 文明開花と教育(明治前期) |
| 3 | | 2 国民教育体制の成立(明治後期) |
| 4 | | 3 学校の拡大と新教育運動(大正期) |
| 5 | | 4 戦時体制と教育(昭和戦前期) |
| 6 | | 5 戦後教育の出發 |
| 7 | | 6 経済成長と教育 |
| 8 | 教育をめぐる思想 | 1 近代教育思想の成立(概観) |

9	2 コメニウス
10	3 ルソー『エミール』・カント
11	4 I・イリイチ『脱学校論』
12	5 M・フーコー

歴史の部分は、昨年度は回数の関係で「経済成長と教育」（1960年代）で終わっているが、例年は最後に『『第三の教育改革』と現代』を置いている。この部分においても歴史的な知識を伝えることが目的ではなく、あくまでも現代の教育を考えるための材料であることを重視している。そのため資料も、法令や文書は最低限とし、絵・図や写真（例えば明治初期の掛け図）を加えたり、文書でも、具体的な授業記録や新聞記事を入れるようにして、できるだけ当時の教育の「雰囲気」を感じられるものにしたいと考えている。

思想の部分については、所謂「教育学」の思想家（ヘルバルトやコンドルセ等）よりも、もう少し原理的な部分で近代教育の原点になっている思想家（コメニウス・ルソー・カント）と、それに対する根源的批判を展開したイリイチとフーコーを取り上げている。そのことで「発達」「学習」「個性」といった現代の教育の基本概念（私たちの教育における「常識」）の成立を知るとともに、それらを相対化する契機が得られるようにと考えている。ただ私の理解不足もあって、なかなか満足のいく授業にならないのが率直なところである。

3 授業の方法

① 配布物・資料など

先にも触れたように、授業では当日のレジュメと資料を配布し、必要に応じて黒板を使っている。パワーポイント等は使い慣れないということもあるが、授業の中でどうしても使わなければならないとは思えないこともあって、昔ながらの授業スタイルを取っている。

授業ではこちらから伝えたいことが多く、学生の人数も多いため、どうしても一方的な話になってしまう。しかしそれでは不十分であるので、前期・後期

各2-3回は、ビデオ・DVDを見るようにしている。例えば「開発と教育」の回では、日本ユネスコ協会から「ユネスコ世界寺子屋運動」に関わるビデオ(中学生以上を対象としているもの)を借り出して利用した。

教育学Bでは、昨年度、JICA(独立行政法人国際協力開発機構)が2004年に作成した「日本の教育体験」というDVDを授業の冒頭で紹介した。これは開発途上国への協力活動の一環として、明以降の近代化に果たした教育の役割を紹介したものである。戦前編と戦後編からなっており、日本の近代教育の歩みと特徴が完結にまとめられているので、教育史のイントロダクション(もしくはまとめ)に活用できる。

このようなビデオ・DVDを使うと、映像によって実感を持って理解することができ、学生には大変好評である。ただ使えるものが十分に整備されていないという問題がある。本年度の前半に教職課程の「教育原理」で何かビデオを取り上げようと考え、その時は教育学科の研究室(青山キャンパス)にあった林竹二の授業記録を使うことができたのであるが、そこにたどり着くまでにかなりの時間を要した。著作権などの関係で難しいのかもしれないが、テレビ番組等含めたライブラリが充実されることを希望している。

② 学生との関わり

先にも述べたように毎回の授業は一方的なものになりがちである。また、授業の前後の時間も殆ど取れないので、そこで質問を受けたりすることも難しい。そのため、少しでも学生からも「発信」できるように、毎回大学の「小テスト用紙」を配り、授業後に提出してもらっている。これは次に述べる出欠確認を兼ねているのであるが、昨年度までは自由に授業についての感想や意見・質問を書いてもらっていた。(何もないければ、出席の確認のために名前だけ書いて出せばよいとしていた。)

ただ今年度は少し変えて、こちらで「ミニ・レポート」の用紙を用意して、あらかじめテーマを示すようにした。例えば「学校選択制・学校五日制」の回では「1義務教育段階の学校で選択制を導入することについて、あなたの意見

自分の「これまで」と「これから」を考える

を、その根拠とともに述べなさい。2 学校五日制のメリット・デメリットを挙げ、あなたの考えを述べなさい。(どちらか一つを選ぶ)」がテーマである。

また「総合的な学習・学力低下論」では「授業で触れた学力モデルを踏まえ、『学力とは何か』について自分なりの意見を述べなさい。」「不登校・ひきこもり」では「『不登校の子どもは学校に戻すのがよい』という意見についてのあなたの考えを述べなさい。」とした。これは宇田光『大学講義の改革——BRD 方式の提案』(北大路書房 2005)を参考として試みたものである。(BRD は「Brief Report for the Day = 当日提出レポート」のこと)同書には学生が主体的に授業に参加できるためのいろいろな工夫が紹介されているが、その一部を使ってみた次第である。「自由に感想」を書くよりも、テーマが与えられていることで受講の意識が明確になると期待されるが、前期の限りでは、まだ十分な結果は得られていない。この点は今後工夫を続けたい。

いずれにしても、学生からの質問・意見提出の回路を確保しておくことは重要である。質問に対しては、原則として次回の授業の冒頭で全体に対して答えることにしている。その際には、どんな質問にもきちんと答えること(あまり授業内容に関係ないものであっても)、またできるだけ「質問を褒める」(「これは大変良い質問です」等と強調する。)ことを心がけている。また場合によっては、個人的に口頭か文章で答える場合もある。さらに学生から意見が出された場合も、たとえそれが批判的・要求的なものであっても、すべて全体に紹介し、できる限りの返答(回答・弁解)を行っている。このような形で学生との個別の関わりをできるだけ持つようにしている。今年度の「ミニ・レポート」についても、次の授業時に代表的な意見をいくつか紹介するようにした。するとそれに対する意見や感想が出てくることもある。本来であれば、こちらで整理をしてプリントとして配るのがいいのだが、その余裕がないので、口頭で行っている。学生から見ても、自分の書いた質問や意見が全体で取り上げられることで、それなりの手応えを感じることもあるようである。

③ 評価・単位

学生への評価は、基本的に学期末レポートで行ってきた。毎回の「小テスト用紙」の提出がある場合には「+α」とするが、出席回数自体はカウントしないこととしてきた。（ただ今年度の前期は、方針を変えて「ミニ・レポート」提出と学期末レポートを単位の条件とした。「ミニ・レポート」提出は、提出回数とその内容で判断するが、提出回数＝出席回数が授業時数の半分以上であることを必要条件とした。この変更については次項で述べる。）

学期末レポートについては、授業で取り上げた内容に関係するテーマを決めて、自由に書くように指示をしている。分量・書式などに特に制約はつけていない。実際のレポートは、B5 レポート用紙一枚に手書きのものから、10 ページ以上にわたる力作まで、多様である。

これまでの問題点としては、HP からの「無断転載」がある。レポートについては毎年、授業中にプリントを配布して伝えているが、その中で必ず「自分の文章と引用を区別すること」「引用の場合は出典を明記すること」と書いている。私は HP からの引用自体は良いと思うが、その場合には、筆者が確定できるものだけを引用するように伝えるようにしている。

しかしそれでも、無断引用の疑いが強いものが出てきたことがあった。最初に気づいたのは、殆ど同一内容の二本のレポートがあったことである。（文末や「てにをは」は変えているが、段落構成や文章の内容は同一であった。）また「このようなことをよく知っているものだ」と感心していたら、同じ内容が書かれている別のレポートがあり、調べたところ、インターネット上の「百科事典」であるウィキペディアが出所であることが分かったこともあった。最近では私も慣れてきたこともあり、幾分は発見することができるようになったが、最初は戸惑ったものであった。

学生には「大学のレポートと一般の出版物では違うかもしれないが、かつて一冊の本の中にわずか数行の無断引用が発見されたことで、職を失った大学教授がいた。」という話をしている。基本的には学生がルールを身につけるようにすることが必要であるが、他方で、無断引用によって書けてしまうような課題

自分の「これまで」と「これから」を考える

を出す側の問題もあるのではないかと考えている。同じレポートを課す場合でも、他人の文章や資料に頼ることのできないようなものができるか、現在考えているところである。

④ 出欠・遅刻管理・私語への対処等

授業を行う上での大きな悩みが、出欠・遅刻の管理と私語対策である。そして未だにこれといった妙案がないのが実状である。

出欠・遅刻については、他の科目でも問題となるのであるが、私は個人的には「学生本人の自覚」に任せればよいと考えている。所謂「一般教養科目」であり、自分の学生時代のことを思っても、出席することだけが大学生活ではないという思いがある。

そのような次第で、当初は出欠を取らない方針を取ってきた。上に述べた「感想」は出すように求めたが、これで出欠確認はしないとしていたので、本当に書くことがある学生だけが提出していた。評価は学期末のレポートのみで行っていた。出席を取らない場合、毎回の出席者は登録数よりかなり少なくなる。「出席を取らなくても学生が聞きたくなるような魅力的な授業を行うべきだ」ということは十分承知しているが、自分の力量の限界と併せて、何を「魅力」と感じるのかという点で学生の意識が多様であることもあり、「魅力的な授業」というものはなかなか難しい。私自身としては、聞きたいと思う学生に出てもらえばよいというのが本心である。また前もってスケジュール表も配っているので、興味がある回にだけでも出てくればよいとも考えていた。

しかし、これに対する批判(不満)が学生から出されたのである。一言で言えば「まじめに出席していることを評価して欲しい」というものである。そこで、ある年に6割以上の出席を単位取得の必要条件とした。そうすると確かに出席者は増えるのであるが、同時に私語と「不正」も増えることになった。「不正」というのは、出席確認に大学の小テスト用紙を使っていたので、授業の最初に用紙を取り、そのまま出て行って授業終了後に提出するということ等である。また遅刻はチェックできないので、授業時間の終わり頃になって入ってくる場

合もある。

そのようなこともあって、今年度は先に述べたように「ミニ・レポート」の用紙を自分で用意し、授業をある程度聞いていなければ書けないような形にしてみたのである。

私語も悩ましい問題である。これについても「講義が面白くないからだ」という意見にもそれなりに根拠があると思うのではあるが、初めから授業内容に「興味・関心」のない学生に「面白い話」をするのは難しい。そしてこれも他の学生から不満が出されるのである。私としてはできるだけ注意をせずに済ませたいというのが率直なところである。一部の学生のために授業を中断するのは嫌なものである。しかし授業の始まりからずっとしゃべっている学生を放っておく訳にもいかないので、何らかの注意をせざるを得ないことになる。聞かぬが無いのならば出てこなければいいと言いたいのが、学生から見れば、出席しなければ単位が取れないから仕方なく出ることになる。

ただ私の経験では、40人程度以下のクラスでは、殆ど私語はない。このくらいの規模であれば教師と学生が直接つながっているという感覚を双方が持てるのであるが、ある規模以上になると、前で話している教師との人間関係を感じることができず、自分の部屋でテレビや映画を見ているのと同じような感覚になるのではないかと思う。(これは多くの人が指摘していることであるが、私も実感としてそう思う。)私語の問題は、クラス規模や出欠管理の問題と併せて考えなければ、個々の講師の努力だけでは解決できないのではないだろうか。

おわりに——授業の改善に向けて——

本学でも少し前から実施されている「授業改善アンケート」は、毎回、自分の授業の改善点を考える貴重な資料として読ませて頂いている。ただその中で思うことは、授業の内容や方法を授業担当者個人の責任において改善していくのは当然であるが、他方、個人的な努力や工夫だけではどうにもできない部分も大きいということである。繰り返し述べたクラス規模もそうであるが、より

自分の「これまで」と「これから」を考える

大きく言えば、青山学院大学の教育または青山スタンダードでの教育をどのようなものとして受験生に伝えてきたのか(逆に言えば、受験生は「青学」に何を期待して入学してきたのか)ということが、実際の授業に対する学生の「満足度」を考える前提となるであろうし、「青スタ」が何を指すものなのかということが、教える側と学ぶ側に共有されていることが必要であろう。

教師間の連携ということは、当然のことではあるが、中学や高校の段階でも難しいことが多い。まして本学のような大規模な大学では、一層困難であろう。しかし「自分の担当する授業だけをやっておればいい」という考えでは、全体としての授業改善は不可能である。少なくとも「青スタ」については、授業担当者の中でその理念や目標を再確認し、相互の授業が関連づけられるような体制作りが求められていると私は考える。私は末端の一非常勤講師に過ぎないけれども、より良い授業作りのためにできるだけのことをさせていただきたいと考えている。

最後になったが、これまでお世話になった諸先生方と事務局の方々に心からお礼を申し上げる。とりわけ文学部教育学科の杉谷祐美子先生には、この4年間にわたり日常の授業その他の多くの面でご面倒をおかけしてきた。改めてお礼を申し上げる次第である。

参考文献

池田輝政『成長するティップス先生——授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部 2001

社団法人私立大学情報教育協会『平成 16 年度 私立大学教員の授業改善白書』2005